

今なお生きる「誠之」の心

小倉光雄 第10期

「千歳ラグビー」の精神を表わす言葉に「誠之」の二文字があります。5期生の若林俊夫先輩が、「これ誠なり」「これを誠にする」と口癖のように言われていた言葉でもあるこの「誠之」（昭和14年千歳中学として創設されたときの校訓）は、千歳魂あるいは千歳の心として「千歳ラグビークラブ」には今なお受け継がれているという。

「誠之」という言葉については、恐らく中国の古典から引用されたものであろうと思うが、本当の意味するところは私には分からない。しかしながら、「誠之」はうそ、いつわりのない真実の道、人として歩むべき道を道徳心をもって正しく生きる心。つまり、お天道様の下を胸を張って堂々と生きていく心であると私なりに理解している。

どんなに時代が変わろうと、世の中が変わろうと道徳心や倫理観が失われることがあってはならないと思うのである。

昨今、世間では不祥事がやたらに多い。1996年は、厚生省事務次官という政府の高官が高級料亭で頻繁に業者から接待を受け、自家用車、マンションの購入費用まで出させていた収賄事件。1997年には、超一流企業である証券会社と銀行のトップマネジメントが一部の総会屋に法律を犯して多額の利益供与をしていたという。あまりにも国民を愚弄しているではないか。

たとえ頭がよく一流大学を優秀な成績で卒業し、社会的に高い地位に就いたとしても、人間として最も大切な道徳心に欠けていたのでは人間失格といわざるを得ない。人間とは弱いもので二度、三度繰り返

すうちに不感症になってしまい、ズルズルとはまり込んでしまうものらしい。それにしても、総会屋事件については大勢いる役員の中で利益供与は止めるべきだと勇気をもって進言できる役員が一人もいなかったとは何とも淋しい気がする。

東大の卒業式で総長が「タダ酒は飲むな!」という訓示をしたと報じられていたが、情けない話ではないか。

私が以前勤めていたエッソ石油（親会社のエクソンも）には非常に厳しい企業倫理がある。その倫理規定は、“我々の会社の方針は、すべての法律を守るに止まるだけでなく、たとえ法律の許す範囲であっても、エッソ石油は最も清廉な行動をとることである。”また、“文化が異なるいかなる社会にあっても誠実さが批判を受けることはない。”と謳っている。

功名心のあまり法律に違反したり、非良心的取引をして成果を上げる社員を認めないのである。年に一度社員は倫理規定に誓約することになっており、その時に必ず思い出すのが、ラグビー部の部歌の2番の歌詞に「誠の心おしなべて…」とある。まさに、「誠の心」＝誠之であった。

いつの時代でも良心的で誠実な行動をとりさえすれば何も恐れることはない。道徳的で倫理的行動、誠実で清廉潔白な行動をとことは、まさに誠之の精神に基づくもので、生涯人間が歩む礎として永遠に継がれていくべきものであろう。

私は残りの人生をこのように精一杯全うしたいと願ひ、そして後輩達にもそう望みたいと思う。